
美しい花園

あきら

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

美しい花園

【Nコード】

N1751A

【作者名】

あきら

【あらすじ】

……綺麗なものには特に近づいちゃあいけん。綺麗なもんにはのう、なーんかしら強い念がこもって産まれてくるもんだ。自然のもんであってもものう、人が作ったもんでもものう……。なーんでもじゃ……。

……綺麗なものには特に近づいちゃいけない。綺麗なもんにはのう、なーんかしら強い念がこもって産まれてくるもんだ。自然のもんであってもものう、人が作ったもんでもものう……。なーんでもじゃ……。

会社帰り、満員電車の中で私は運良く席に座ることができ、小さく縮こまって、うとうととしていた。途中で花屋さんに寄って買ってきた花が傷つかないようにしっかりと抱きしめながら……。花の匂いにふと昔のことを思い出した。

祖母の家は田舎のほうにあり、周りを自然が囲んでいた。私はそこが好きで、毎年お盆や正月に遊びに行けるのを楽しみにしていた。父は私が物心つく前に他界し、私にとっての家族は母と、その母の母であるおばあちゃんだけだった。おばあちゃんはとても優しくて色んな事を知っていた。おばあちゃんの話を聞くのも、私にはとても嬉しいことだった。あれは何歳の頃だったろう？ 私は一人で遊んでいて、好奇心からおばあちゃんの家の周辺を散歩していた。「遠くへいつちやあいけないよ」というおばあちゃんの言葉も、私の好奇心の前では無力だった。裏に大きな森があり、未知の世界という子供にはとても魅力的な世界が広がっていた。私は惹かれるように奥へ奥へと入っていった。と、突然ぼっかりと視界が開け、綺麗な花が咲きほこる草原に出た。私はその景色を今でも鮮やかに覚えている。あれから色々な花を見てきたがあれほど美しい花には未だに出会えずにいる。記憶の中で美化されているのかもしれないのだけど……。私はどうにかこうにか、おばあちゃんの家に戻ることができ、その日見つけた「綺麗な場所」のことを、母とおばあちゃん

に自慢げに話した。そして摘んできたあの花を見せた。私は誉められるのを期待していた。しかし、母はとても怖い顔であの花を取り上げどこかに持って行ってしまった。おばあちゃんは私を諭すように、「今日はしかたないねえ。楽しかったかい？ でも二度とあそこに行つちやいけないよ」と優しい声で言った。しかし優しい声の中に私はえも言えぬ強制力を感じた。幼心に二度とおばあちゃんとの約束を破らないと決心したのだ。そしておばあちゃんは聞こえないような小さな声で呟いた……。

「あの花は人生を喰うんだ……」
私にはそう聞こえた。

そういえばあれ以来、祖母の家に連れていってもらえなかったな。あれから間もなくして祖母は私たちと同居した。祖母はそれからも色んな話をしてくれた。だけど一番印象に残った話は……。

……綺麗なものには特に近づいちゃいけない。綺麗なもんにはのう、なーんかしら強い念がこもって産まれてくるもんだ。自然のもんであつてもものう、人が作ったもんでもものう……。なーんでもじゃ……。

という話だった。私はこの話を聞く度にあの綺麗な草原に咲く、綺麗な花のことを思い浮かべた。

「つぎはー、東町ー東町ー」

駅員のアナウンスに私は、はつと意識を取り戻す。今日は彼と東町で食事する約束をしていたのだ。慌てて降りる準備をする。

彼は、雅文はとても綺麗なだ。私は母子家庭で育つたためか、男性に対して恐怖症とまで行かないまでも、かなりの抵抗があつた。私は小説や少女漫画の世界に逃避し、粗暴で卑猥で不潔な現実の男からは距離を置いていた。そんな思春期を過ごし、大学生になった。そこで雅文と出会った。話しかけてきたのは彼の方からだつた。それまでもこうやって話しかけてくる男はいたが、私は無視したり、わざときついことを言ったりして、かわしてきた。だけど、彼は無

視できなかった。私の中の何かを思いつきり引つ張るようなそんな感じがした。彫刻のような整った顔立ち、そして尽きることを知らない教養あふれる会話、男臭さを微塵も感じさせない清潔な装い。私にとって彼は王子様そのものだった。そして私たちはつき合いました。出会いから四年たった今でも彼は私の理想の人であり続けた。時々、あの祖母の話进行い出し、彼の綺麗さに妙な罪悪感を感じてしまう。お互い就職してからは忙しくてなかなか会えなかったが、月に一度は必ず時間を空けて会うことにしていた。今日がその日なのだ。この間電話で喧嘩してそのままだったので、今日は遅れるわけにはいかなかった。私は時計を見て、約束の時間にまだまだ余裕があるのを確認して胸をなで下ろした。喧嘩の理由は私が結婚の話をはのめかしたからだだった。私としてはそろそろ考えてもいい時期では？ と思っていたので、つい先走ってしまったのだ。彼は今将来を左右する大事な時期で大きなプロジェクトに関わっていた。そんな時に結婚の話を持ち出した私が悪いのだ。あと少し我慢すれば彼の仕事も一段落し真剣に考えてくれるようになるだろう。

待ち合わせの時間ちょうどに彼はやってきた。「まったかい？」と優しい声で話しかけてくれた。この間の喧嘩のことは引きずっていない様だった。「ううん」と私は答え、彼に謝った。彼は優しく「気にしてないよ」と言ってくれた。私はとても上機嫌になり、その日いつもよりお酒をたくさん飲んだ。しかし別れ際は彼は、「しばらく仕事に専念したいんだ。この仕事が落ち着いたら連絡する」と言った。私はこれ以上彼のお荷物にはなりたくない一心で「わかったわ」と答えた。

私は最初、それを二日酔いだと思った。吐き気と食欲不振。しかし、何かが違う……。生理が遅れていることも気になった。もともと不順ではあったが、私は一つの希望にすがりたかったのだ。産婦人科に相談に行くと、妊娠していることが判明した。歓喜と不安がわき上がる。今は彼の負担になるわけにはいかない。彼は今大事な時期なのだ。彼が落ち着くまでは黙っていようと決心した。

それから、私は彼からの連絡を一日千秋の思いで待ちわびた。待っている間私は幸せな空想に浸っていた。彼との結婚。綺麗な花に囲まれ、綺麗な彼とかわいい赤ん坊。私はふとあの綺麗な草原を思い出した。あそこに咲くあの綺麗な花。私の中でまた少女じみた空想が始まる。あの場所で二人約束を交わそう。そしてあの花を持ってきて二人の新しい部屋に飾ろう。

二週間が過ぎ、彼から連絡が来た。仕事は無事に終わり、今度の終末は連休がとれるとの話だった。私は旅行に出る事を提案した。あの草原に疲れている彼を連れ行きかけた。そして彼に告げるのだ、赤ちゃんができたの……と。彼は「ちょうどよかった。僕の方も君とゆっくり話が出来たかった」と言ってくれた。私はとてもうきうきして、旅の準備を始めた。

久しぶりに会う彼は少しやせていて、今までの仕事のハードさが伝わってきた。電車の中でもずつと眠っていた。昨日もプロジェクタのまとめで遅くまで仕事をしていたそうだった。彼は大きな仕事を成功させ、そして私に話したいと言ったのだ。私から言い出さなくても彼の方から結婚を申し込んでくれるかもしれない。彼の寝顔は以前となんら変わっていなかった。この綺麗な寝顔を私は一生見続けるのだ。幸せという言葉が胸に満ち顔からあふれ出る。

目的の土地につく。私はおぼろげな記憶を頼りに、祖母が住んでいたあの家を目指した。彼は「なあどこいくんだ？」としきりに聞いてきたが、私は「ないしょよ」と答え続けた。おばあちゃんの家はずでに取り壊され、空き地になっていた。その裏手に森が広がっている。記憶がフラッシュバックする。この緑に反射する光、草木の匂い、木々の音。そういえば母はいつもお墓参りをしに帰ってきていたのだ。誰の？ 父の……。なぜ母方の実家に父の墓が？ 違和感が広がる。しかし、私は自分自身に言いきかせる。そんな事今の私には関係ないわ。私は彼とここに来たのだ。幸せのために。

森の中を進むと、あの時のように突然、ぱあっと視界が開けた。「綺麗でしょ？」私はあのころのように得意げになって彼に言った。

「ああ……」彼はこの景色に圧倒されていた。一面に広がる草原。太陽の光がまんべんなく照らし、綺麗な緑色が燃えるように輝いている。そしてその中心あたりに自然にできた花畑があり、あの花が風にそよいで揺れていた。幻想的な世界に私も彼も我を忘れてはしやぎ回った。しばらくして、二人で花畑に寝転がって、花の隙間から空を見上げる。

「お前に話したいことがあるんだ……」

空を見つめながら彼が囁いた。その顔からは彼が何か決意していることを感じられた。私は、ついに来た、と心の中で身構えた。これで私は彼と……。しかし、彼の言葉はそんな私の心を引き裂いた。「二ヶ月後、上司の娘と結婚する。今回の仕事の上に認められてね。僕にとつては願ってもないチャンスなんだ。もう婚約も済ませてきた。すまない、わかって欲しい。許して欲しい」

私はこの瞬間全てを理解した。父の墓がここにあつた理由、母があの花を見た瞬間鬼のような形相になつた理由。私は無言で立ち上がった。視界には一面綺麗な花が広がっていた。

「綺麗なものには特に近づいちゃいけない。綺麗なものには、なにかしら強い念がこもって産まれてくる。自然のものであつても、人が作つたものでも……。なんでも……」私はぶつぶつと念じるように祖母の言葉を呟いていた。

「な……なにをいつてるんだ？」彼が……なにかを言っている。私には聞き取れなかった。

父はきつと母に殺されたのだ、この場所です。

「あの花は人生を喰う……」私はまた祖母の言葉を呟いて、そして今それを理解できて、誉められた子供のよ様な気分で、にたあ、と笑う。

……お母さんも同じ気持ちだったのかな？ 私はお腹をいたわるようにさすり、そして……。足下に落ちていた鋭くとがった石を拾い上げた……。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1751a/>

美しい花園

2008年11月7日07時06分発行